

松浦佐用媛石魂錄

後編

七

大尾



松浦佐用媛石魂録後編卷之七

東都

曲亭主人

編次

第二回

乾坤丸中、亦復親族を聚ふ

さてその、ち、さきのたんぱいつねたか
案了前齣再説。前探題經高ハ、迹を暗ま一影を隠し。三総追捕を免れざる。緣由を原るふ。
曩ハ經高孤城ハ籠く。鑓倉の追討使。實政の大軍ハ捕圍き。一時城中の脱穴より。士卒
と共ハ落亡せし。頼切ハ股肱の老黨。邊圻ノ平次將純を。主を棄て行方と知らせむ。
況其餘の軍兵も。食四落ハ散りなり果る。身ハ隨ふ者として。淳實伊加太郎。槍垣轉馬。と
呼れざる。只兩箇の若黨のミ。左右ハ扈從をとりける。現落人の沿習として。天ハ踞る地ハ踏
ま。松木樵る山の賤婦ハ。一碗の糧を乞ひ。綱曳る浦の誓戸ハ。半夕の宿を討んと欲する
ふ。人食逆徒の殘兵ならん。と思へば是を憐まむ。壮佼等を驅催し。捕捕んとあさりし
り。辛く其所を立去り。ゆた／＼松浦ある。今福の浦を過時。日暮されど宿もあ

た。主従いさく鐵疲きて。いとせん術あかりけり。登時經高は。磯石に尻を掛く。伊加太轉馬を召近づけ。かくまで武運は竭たし身の。倘浦人は生拘られて。矢田の陣所へ牽れあは。取の上の又恥へ。それいふ、よて腹を切らん。汝等が公錯しく。首を海へ沈めよう。心得る歟と。操返を。覺期の遺言雄々げに。鎧を脱ぎ坐を占まども。禁もやまる。と今更に。誠忠の心もく。あゝまで従ひ来たるは非む。折もよく經高を。撃て實政は降参せん。其事尚果さむ。自ら腰は著られたる。金を奪ふて逆電をべいと。示合せし者共あれば。今經高が自殺の覺期を。己が利とて。竊に歡び。事稍成ぬ。と思へども。さり氣なれ面色して。兩人齊一跪た。つくぐと打聞て。泣つゝ。共侶ふ答るやう。千軍万馬は將ぐる御身も武運は竭させ給ひぬる。御覺期こそ痛ましけれ。御先途を見ん爲は。是まで御供仕候へども。大厦の傾んとほる時。一本の支ゆべたはあらず。御自害候は。御頸を給いつく。石を附て海中は推沈め。某等も共侶ふ。底の水層とあらん事。切てもの本意は候とくく。と

薦るふど。經高遂に己を得む。いふよ及ぶ。と短刀を抜えちち拿直しく。腹を切らんとほる程。やよ等給へ。と呼禁めく。十七八ある美少年。萌葱威の身甲は。龍甲形ある。肱甲脇盾して。紫銅造の兩刀を跨へ。黒蛇皮拷の小袖を衣とけが。磯馴松の遺より。忽然と一顯出を。主従駭怪とく。其方を齊一見うへりけ。誰や。とばかり問うけて。尚云ともなうり。少年はさもあま。と經高は打對ひて。緣故を知召給。御不審に理り。某事。牛淵九郎清繩が。兵法の弟子より。焼口歌二郎得時と呼れし者。曩は清繩は従て飛龍渡の砦を成し候ひし。清繩は戰没して。砦を東軍は攻潰され。筆所所の二百餘騎。或は撃れ。或は落亡。既に資を失ふものう。某殘兵を招撫めて。再び飛龍渡の砦を執建い。うで會稽の恥を雪ん。と思ふは甲斐あはれ君の没落。寓方の城を落され給ひ。御往方知れざるよし。世の風聲は隠れなければ。環會奉りて。犬馬の力を盡さんと。思ひし孤忠の空しく。けふ見参入り。歡び。何事歟。是は優べた。某既に御隱宅を準備して候へば。御心安く思召れよ。自殺を急せ給はん。に物体なく候。と云は經高又驚れて。且歡び

て刃を斂め。原来和殿の清繩が。兵法の弟子なり。一敗。豫て其姓名ども。傳聞する事も
なれを。かくまで心を用ひられ。清繩あゝ、蘇生して。それを資る心地を。叔も和
殿の準備せ。隱宅の何處ぞや。と問へば。歌二郎聲を密めて。さん候。而九ヶ國の。總て敵地
ありされば。よゝや深山の奥ありとも。陸地の御住ひに。尚危し。其此義を思ふをもて。い
と大に。お船を。ハ九艘造。洊め。連環。一々繋合せ。うら。九艘なれども。一艘は異あり。む
其船の一艘毎。長さ二十間餘あり。これを九艘合。されば。百八九十間の大船。船中。置
ところ。士卒二百餘人あり。又兵糧も。乏し。うら。且船の中。菜園あり。日毎。獵船を。お
ろ。洊め。漁獵を。事と。ほる時。庖厨。物を。欠く。と。あ。君此船。まゝ。ほさ。東西南北。風
は。任。到らざる。處なく。出沒。不測の。大利あり。進て。九ヶ國の。港々を。討略る。べく。退た
て。孤島。歌。討手の。軍兵を。防。一。倘其志。を得。勢。微。一。て。成。難。く。船
は。生涯を送るとも。誰。よく。是を。知。べ。是。洋中の。別世界。究竟の。隱宅。あれば。則。その
船を。命。乾坤丸。と呼。一。り。誘。給。へ。御迎の。三板船。浦邊。あり。と。く。とい。を。が。

たる。思ひ。け。な。誠心。は。經高。只。顧。感。嘆。あ。つ。恥。て。頼。み。加。え。る。手。を。釋。て。親。を。改。め。弓
折。れ。勢。ひ。究。て。落。人。と。あり。より。思。顧。の。者。も。棄。れ。て。且。が。仇。あ。る。者。も。な。し。と思
ひ。一。世。も。思。ひ。さ。や。か。は。資。の。あ。ら。ん。と。い。清繩。が。弟子。と。る。縁。を。忘。れ。を。義。は。伏。る。とも。
年。いと。若。身。一。ある。を。聞。く。が。如。た。大。義。の。計。略。感。ず。る。は。尚。餘。と。あり。既。は。準備。せ。られ
し。を。い。う。で。う。に。推。辭。べ。た。や。轉。馬。も。伊。加。太。郎。も。歌。二。郎。は。對。面。し。て。歡。び。を。速。む。や。とい
い。れ。く。兩。人。進。み。出。く。名。告。を。し。つ。主。は。連。合。の。身。の。幸。ひ。を。歡。び。たり。登。時。歌。二。郎。は。澳
の方。は。打。向。ひ。く。叫。子。の。笛。を。吹。鳴。ら。せ。ば。忽。然。と。一。く。兩。三。箇。の。雜。兵。快。船。を。漕。走。ら。し。て。浪
打。際。は。著。け。し。う。ば。歌。二。郎。是。と。見。く。則。經。高。主。從。と。扶。けて。船。は。乗。移。し。て。其。身。も。共。に
乗。舟。程。は。雜。兵。等。を。艦。と。推。進。く。漕。ぐ。と。幾。里。な。は。と。知。ら。む。既。し。て。乾坤丸。の。邊。に。船。と。寄
せ。し。う。ば。歌。二。郎。は。又。經。高。主。從。と。件。の。大。船。に。請。乗。し。く。馳。て。三板船。と。引。揚。け。り。當。下。經。高
主。從。は。首。と。回。し。て。此。大。船。の。光。景。と。見。る。は。二十間。は。餘。き。船。と。九艘。繋。合。し。され。ば。總
て。百。八。九。十。間。あり。裡。面。は。樓。閣。を。作。致。さ。し。奇。麗。壯。觀。云。べ。う。も。あ。ら。む。此。餘。書。齋。あり。便

室子舎耳房あり。局の内ある前載より。花紅葉のいろ／＼おゆと載並べ。菜園の取毎より寒暑の時より従て。百の種子と蒔散さゆ。異木芳草の美しき。秋果は違あらむ。且弓箭刀戟のいと多なゆ。衣裳調度は至るまで。満足らむと云となれば。波底ありと云。龍宮城はあらざりせば。水仙人の聚ふと云。貝闕玉洞ならん歟。と疑惑ふ可まて。目を驚さむと云となし。有此而堯口歌二郎。上座ある細の上。經高を請登して。船中にある宗徒の士卒を。悉く見參せしめ。且蟬蛸たる美女十人むうりを。其左右は侍らして。祝壽の盃を薦めたる。饗饌大方あらざれば。經高歡喜雀躍して。望足りぬ。と思ひけり。勢ひかくの如くあれば。檣垣轉馬浮寶伊太郎等。忽地野心を轉し。主小従ふと故の如く。且歌二郎は媚諛ひく。酒内の餘鼎を貪りつ。光陰をまゝ送りけり。然程は堯口歌二郎。乾坤北の連環船を。一所は歌置らむ。速死時の千里二千里。近しと云とも百里二百里。陸を距る海を浮き。進退出没。世の人。知るを要せむ。さま／＼月暗く。風波靜かり。夜の肥前の九龍見崎は船を近づけ。或は江浦東島。若松西島。奈留兵庫。得仙白石。佐井官岡。榮螺赤島

は船歌りして。曉方にある毎。船を速く退け。浦曲は親しむとなれば。九ヶ國の武士守護人も。定より是を知る者あり。あゝをもて鎌倉より。追討の沙汰もかく。既より三稜を歴り。ゆれば此歳月を。空に送らざる者。歌二郎只一人の。鎌倉の風聞を撈り。知らん爲もとて。東へ赴く時もあり。或は智勇捷れたる。郷士浮浪人を相譚て。いうて身方はさきんとて。折々南北に旅宿して。或は二三个月。或は半年他郷あり。經高主従は。歌二郎はのこ憚りて。渠が船中に在る時。酒宴遊興稀あれども。其他郷にある時。酒は耽り色を好みて。管絃のあらべ絶る隙なく。酒地内林の宴樂に。驕者を極めて逆謀を事とせむ。生涯かくてあらんぬ。樂王侯も優りたり。尚限りおた齡をさもちて。いつまでもかくの如く。あらまほしけれ。と思ひしう。心利する雜兵を。彼此へ達して。不老の術。不死の藥を討ると頻り。不題鼠川加二郎武行。最も相摸ある。勳の磯よく。瀬川采女吉次を狙撃し時。身方の兩人。長城野兵太と奴隷貫九郎。必死の深痕は付き。かども。其身恙ありしう。早く其處を立去。攝津の兵庫お躲き居る。鎌倉執權の下知として。逆賊經高

が在處を知り、撃捕て進らせなば、縦大罪ある者へとも、其罪を赦免して、賞祿を賜るべし。
と洵られしを、加二郎早く傳聞て、肚裏と思ふやう。それの主君は罪を得ず、鎌倉を追拂ひ
れ、更は又怨ある。瀬川吉次を撃果せしう。左ても右ても陰羅戸へ。然ると這回の下知より
りて、彼經高と撃捕らば、此身の罪を免されて、本領安堵疑ひあり。ある又運の向へるを。
竊は西國へ趣て、經高と索んものを。と尋思を一つ、其年の夏の比より筑紫に到りて。
をさく、經高が在所を搜索め、かども。一毫も便宜を得ず。とかく走る程は盤纏竭く。い
とせせん術ありければ、其次の年の春に比より、肥前國松浦郡、九段見崎は漂泊し、瀬
船を乗習ひ、漁獵をして世を渡る程。今茲春三月の下津、思ひを綱に引うけ、一口の大刀
を獲たり。柄を解放ちて、大刀の銘を見る。不老不死の四字と鑽著たり。登時加二郎思ふや
う。此不老不死丸の名刀。瀬川采女が先祖相傳の重寶にて、長さ一尺六寸あり。吉次常
は副佩し、て身と放さむと云ふ。と豫傳聞さる。此刀にてあらんむらめ。か、れば
吉次が亡骸の暴波は引き、時、此名刀も海に沈みて、あゝらへ漂ひ来されるあらん。そをど

まれかくもあれ。此刀と售るならば、思ひの隨に價を得つべし。よれ物價なり。と欲び、件
の刀と携つ。日々は巷に立出て、人の過ると見る毎は、聲高やう呼ひるやう。それ
一口の名刀あり。此は唐山ある。後漢の仙人鍾離權が、えいめ俗に在り。時其人はあふ
傳授せられし。青龍の劍、即是。我朝にては、文治年間、常陸坊海尊を夢想ふ感得し。
不老不死丸と名づけたる。異國傳來の靈劍。人倫是を帶る時、魔を降し、禍を禳ひ。
富貴其身、餘りある。壽命は天地と等し。かるべし。身も換ざる寶あれども、其徳を其身
の相應しから給は。活却あさんと思ふ。誰そ一千兩の金をもて、此名刀を買んや否。あれ
買むや。と誇顔。終日聲を喧せども、人食狂人として、笑ひざる者ありけり。有此程
は、彼經高が指揮より、不老の術、不死の藥を討ん爲ふ。扁舟を九段見崎の磯邊に著て。
彼此を徘徊し、乾坤丸の雜兵兩三名。今加二郎が云々と、呼ひるを打聞て、尚又よ
を諮る。加二郎はものゝく、説誇ると前の如し。雜兵歡び、領たて。主君のこの
月ごろ、不老の術、不死の藥を、求め給ふ事頻りある。其刀は奇特ありて、汝がいへる如

くあらば。價を論ぜむ買せ給はん。誘共侶よこあらへ来よと云ふ加二郎も亦歡びて。伴れ
つ、行程は。士卒等の件の扁舟は。加二郎を打乗して。何處となく潛走するを。加二郎
は訝る。屢宿所を。諮る。雜兵等によくも答へむ。汝只今問むとも。彼處へ参らば自
ら知らん。王が主君は京家ふあらむ。又鎌倉へも從ひ給はん。天地の間は獨立して。富大洋
を有ち給へば。さばうりの物何うあらん。御心ふどお稱せ給はん。價は汝が隨意あるべし。
然るを詰むとら。と計語ひとく寤めて。頻り小櫃をぞ操りける。此時乾坤丸の連環
船は。九艘見崎を相距ると。五六十里の澳中はあり。九艘見は原九蒼海へ。件の九艘の連環
船。此出崎より見ゆる日の餘の浦々より多うりければ。九蒼海を改て九艘見と云ふるべ
し。間話休題。燒口歌二郎得時。此春二月の比よりして。乾坤丸の船中はあり。さばれ病
著のよし聞え。閑籠てのさありうら。經高是を幸ひふま。忌憚る所なく。此日も亂
酒ふ酩酊。一歌儼る侍兒共ふ。打雜つ。主は諸ふ浮簀伊加太。槍垣轉馬は左右ふ
在り。紬を資る崇候の時を得見は高笑ひ。俱は興をぞ催しける。浩處は肥前の松

浦へ趣れ。雜兵兩三名。鼠川加二郎を將く歸り来つ。食共侶は跪く。階下は聲をふり
立ち。恐れながら申上候。いと。呼はるふ。伊加太轉馬は是を見。その何事ぞ疾まう
せ。と云ふ一人進よりて。某等仰は從ひ。連日港口々々を打巡り。不老の術不死の藥
を討あるに候ひし。今日九艘見崎なる街頭は立ち。一口の刀を携。價一千金は售ん
と云者あり。即便縁故を諮候ひし。件の刀は。不老不死丸と名けたる。仙傳の靈寶。此
刀を帶る時。富貴其身は餘りありて。壽命限りなしといへり。是ふよりて件の男を召從
へ。候。と云を經高打聞。そいと愛され名刀。傳来正した微やある。と聞れて加
二郎おる。進み出願を奉て。携来たる件の刀を。とり揚々膝は推立。抑此不老不
死丸の名刀。後漢の仙人鍾離權が。青龍の劍。即是。我朝文治の年間。至る常陸坊海
尊。夢想ふ是を感得。仙術を得。老を死を。今尚陸奥の山中は在り。某が先祖は。海
尊仙人は俗縁あり。お、をもく此名刀を相傳せり。然るは某壽命。此刀を帶るは相應
し。うらむ。徳ある人ふ賣與。お。還て便著を得つべし。と云。示現を蒙て候へば。一千金

の價を求め。賣ばや。と思ひつゝ。日毎は街頭に立在。其人を俟たれども。未だ望を遂げり。ふ。賢君の御内人。此刀をもて参りて。售奉ま。といれり。う。波を犯し。参上せり。と。爲の大財主。願ふに先よく。賣して買取らせ給へ。と。實事。やうに説話して。刀を高き。よまれば。伊加太郎心得て。執次。刀を經高。をう受取り。拔えあち。鏝下より刀尖まで。熟うち見て。うち微笑。仙傳授與の來歴。定うあらぬ事なれども。名刀。疑ひ。不老不死の銘。愛。價。望。仕。思ふ。我の生れな。の。漁者。あるべ。愚まを告。い。問。加二。些も擬議。賢察の如く。某。鎌倉の執權。北條時宗。仕。鼠川加二。武行と呼。者。朋輩の讒言を釋。爲。對決を請。う。時宗最。の沙汰をもて。某を追放せり。此怨。堪。され。件の讒者。瀬川采女吉次と云者を。動の磯。撃果。て。遠く肥の州。跡を隠。津浪三。及。もて。盤纏。て。せん術。ければ。漁翁。身を寓。て。網引。もて生活。は。ある。已。を得ざる。世。賢君良將ありて。用。事。候。死。もて仕。まつ。と。豫。よ

り思ひ候。いと。憚。ある言。某。御内人。此刀を求め給。主の宿所を問候。ひ。吾主君。京家。ある。又。鎌倉。も。從。給。富大洋。有。給。ふ。とい。れ。事。心得。され。然。君。東海。龍王。も。を。を。何處。候。と。問。へ。經高。う。ち。笑。ひ。汝。疑。ひ。さ。も。ある。今。其。素生。を。誦。を。聞。く。舊主時宗。罪。を得。讒者瀬川吉次。を。撃果。亡命。と。る。者。と。い。へ。上。隠。ま。説示。さん。これ。北條一家の大姓。筑紫の探題。經高。兄。を。害。せ。時宗。が。非道。の。行。を。見。る。忍。び。大義。の。旗。を。揚。し。か。ど。勢。ひ。微。ふ。して。事成。ら。寓。方。城。を。退。去。て。年。來。此。船。中。に。あり。殘兵。を。招。た。集。め。九州。を。討。略。ら。んと。思。ひ。つ。か。く。まで。母。が。安樂。光陰。を。送。る。牛淵九郎。が。第。子。あり。磯口歌二。郎。得。時。が。忠義。の。資。母。依。る。も。れ。う。ら。身。天授。の。洪福。なく。今。又。こ。至。ら。ん。歌二。郎。三。総。以。來。折々。諸國。を。巡。歴。して。を。さ。身。方。と。招。け。ども。未。だ。智勇。の。良士。と。得。ぬ。然。る。は。我。が。愛。臣。牛淵九郎。清繩。が。讐。敵。瀬川采女。と。撃。し。と。歎。を。歡。ぶ。べく。賞。を。べ。し。け。ふ。より。して。吾。母。仕。へ。よ。軍功。あら。重。く。用。ひ。ん。汝。が。心。い。う。と。ぞ。と。再。

問れて加二郎は。肚裏思ふやう。それの兵庫舟在りし比より。這經高と撃捕て。鎌倉へ歸
參せんと。思ひよけれど在處知まねば。空は三稔と過せし。今圖らむし。經高が。隱宅に
來ぬる事。定はこよふ幸ひ。渠身のよるべくありて。船は住ひ水は深ひ。些の安樂は
誘るとも。いうむうり。此事やある。且くこゝ舟足と駐め。折と聞ひ撃捕るべし。經高
とどは結果。あは。餘の奴原に怖るゝ舟足らむ。呼あうあり。と立地舟。分別あつ。莞爾と
笑て。むうし。齊國の孫臋。片足痺て候へども。智謀の後の世まで軍師たり。我朝ある。鎌
倉權五郎景政。矢傷は隻目と失ひしかども。萬夫無當の勇士。とある人のいひ候ひ
た。かくれば君も某が。羸弱不具あると嫌ひせ給ひて。召使んと仰るる。此身の幸ひ。何
事歟。是は優べた。いうで犬馬の力と盡し。時宗と討滅を。計議と旋らし候はん。既舟主
従る上に見參れ。牽出物。其名刀。そが儘舟。受収めさ。給へうし。價と望候はむ。と
いひ。瞞る倭辯と。經高疑ふ。氣色もあ。然らば鼠川加二郎。兩刀衣裳と取らせよ。と
聲高やう。母呼れば。速侍。な。近習の。壯佼。承りぬ。と應つ。大小の刀二口と。小袖袴

とどり具ひ。長蓋は打藏せし。と。や。兩人。てもて來しければ。加二郎。是と受藏れ。思
と拜し退れて。件の衣裳と被とりける。登時經高。加二郎と將々來る。雜兵等と。勢へ
ば。皆頼とつた。瘡痺と捺りて。武者。屯へ。退く程。加二郎。衣裳と更め。中刀と腰舟帶て。
又經高。見參を。經高。是と召登りて。主従不轉の。盃と取らせんと。する程。矮屏の陰に
りあ。吾君。霎時等。給へと。禁め。顯れ出る者あり。經高。主従。驚れ。齊一。其方と見
へれば。是。則。別人。あらむ。號口。歌二郎。得時。病後の。衣裳。華やう。腰刀ととり退け。主
は。對ひて。禮儀。正しく。恙なれと。祝し。る。辨舌。人柄。重く。れて。席上。の。盃。盤と。昔々。げ
打見。る。氣色。舟。憚る。槍垣。轉馬。淳實。伊加太。の。身と。縮して。序次。わろ。と思ふ。のと。歌
は。侍り。侍兒。等。誰。分付。ねど。盃。盤と。手舟。取。身と。起。つ。逃る。が。如く。退。け。けり。そ
が。中。は。經高。酒。嘍。と。貌と。改め。こ。珍ら。歌二郎。嚮。舟。所。勞。ある。より。舟。久。く。對
面。参。ざり。舟。思ひ。が。け。あ。れ。猛。の。出。仕。病。著。既。は。痊。り。歟。火。急。の。要。諱。ある。故。歟。と。問
へ。ば。歌二郎。膝。を進。め。さん。候。賤。恙。全。く。痊。る。後。ども。申。上。べ。た。よ。あれば。推。て。只。今。出

仕せり。君の大義と外ふ。日毎の酒宴遊興。女子小人と近づけ。樂く思召る。歟。薪を造る乙鳥の。薪を燃て巢と焼くを。知らざる。似くいと危。其彼處ふ候ひ。鼠川加の二郎が進らせざる。不老不死丸の傳来も。渠と家臣はあされ。よしも。洩聞く毎ふ心得が。く。疑。死事いと多うり。願ふ御免を蒙る。此義と質候。ん。といひつ。加二郎は。打對ひて。武行近く進候へ。和殿あの名刀。後漢の仙人鍾離權が。青龍の劍あり。海尊が感得せ。と云事おを信られね。某曾才子傳。列仙傳。據て考る。鍾離權字の。叔道。和谷子。又王陽子と號。又雲房先生と稱。此人漢帝の命を受て。吐蕃の羌胡を征伐せし時。利を失ひ。思ひむ。山谷は走り入り。異人は遭ふ。仙術と。青龍劍の法を得。か。れば青龍劍の名目。只一腰を指て云。劍の名。非む。譬は彼傳燈録。活人劍殺人劍の名目ある如く。青龍劍の仙傳の。法術の名あるべ。然る劍ありとも。今見る所の打刀。劍の總。兩刃ふ。劈斫るを利とされ。便和名をつる。ぎといへり。けふ和殿が。携る。不老不死丸の片刀。是をかたと和名せ。即片刀

と云義あり。此義のいふ。詰られても。加二郎は。此も怯ま。其文字は疎ければ。青龍劍の仙方の。名ある。否をあらねども。初の劍ありけんを。海尊是を感得して。鍛更めて。刀ふ。あざる歟。是も亦知るべうらむ。そのとまれかくもあ。凡刀劍の利とる。堅た斫るを實と。其く不死丸の。利鈍と。鈍給へ。よ。藤身の軀ありとも。豆腐を切るより易うるべ。是仙傳の微。と云。歌二郎領た。その究竟の物をあれ。某新刀を。鍛さんとて。雜兵等分付。世よるべ。た。食悲人を。將。来。と。達せ。長門州大津郡。阿川の。あ。ある。向と云。出。一箇の。人を捕へ。来。某病中。あるをもて。そ。儘雜兵等。預置。此者をもて。鈍を。吾君も御覽せよ。といひつ。外面は。打向ひ。者共ある。預置。向の。人を牽出せ。とく。せよ。と呼。立。豫準備を。と。りけん。承りぬ。と。應。る。雜兵二名。庭門ある。折戸の。より立出。病腫。る。一箇の。人。素を被け。引。搦。縁。近。推居けり。經高を。首。と。金。見。肩を。擽。め。噫。無。腫。張。る。全身。の。蝦蟆の。背。異。あ。定。怪。有。の。病人も。世。あ。れば。あ



る者ふこそ。嘸しもやまる胸より。どくくいあ給へう。と云を歌二郎見うへりて。人々さのミ嫌ひ給ふ。渠に全身腫張。歩行素より不自由。耳聴けれども、のいね。只真言を唱るのミ。尋常の人より此き。兩三人の肥肉あり。鰯物ふに究竟あらん。武行伴の刀をもて。今此者を鰯もや否。と問れて加二郎歡ば。そも御家老の指揮あれども。仙傳非常の名刀も。かくまで脆脆に頼人を破らば。其罰も亦揃り難。其義に許させ給ひね。と推辭むを歌二郎打笑ひ。然らば此頼人の外。おほ鰯さまべた物多う。者共早く秋布を牽出さむ。と呼立るを。一箇の雜兵門と答て。捕繩被。秋布を。又庭門より牽寄され。頼人の繩拿る雜兵。傍に退け立替るを。秋布屢く見うへりて。彼にいぬる日向の崎ふ。見失ひたる者。痛ま。彼人も。捕拘られて。此船中。牽れふけり。と思へども。と問ひ難て嘆息の。外に言葉もふく。と雨に響る。櫻が枝。かゝる。緋袴の萬葉。牽居られ。ついにあるを。加二郎は。と見つ。吐。と打駭。胸を鎮めて。思へども。思ひうねつ。うち目成さ。秋布も亦目を反。加二郎。と見くければ。憤然と。怒り得。堪

む。立まくまれば。雜兵が。動たなせど。と繩拿詰。再び拱地と推居。當下歌二郎。經高。打對ひ。吾君あ。の女を。奪せよ。渠に清繩が。警敵。瀬川吉次が。妻秋布。あゝ。候鼠川加二郎。秋布が。親博多彌四郎素延の。仇な。在處を。索巡り。伊万里の。莊に。到着せ。某早く。搜知。昨宵雜兵等を。彼處へ。遣。其所親三四名と。共侶。生拘。鰯物ふに相應。た。女ふ。あを。候へ。と云。經高頸を。鰯。眼を。斜。して。餘念なく。見落る。と半胸む。思。をも。太息。と。吻て。瀬川吉次が。妻秋布。儔稀ある。美人。と。年未傳聞。るが。思ふ。ま。て。妖艶。見。骨細く。肉。柔。美女をもて。鰯。あ。鋸刀。とも。必。所。きん。渠。志。と。傾けて。され。從。ふ。者。あ。ら。ば。娶。娶。ふ。親。く。使。ん。秋布。と。共。侶。生。拘。り。る。者。あ。ら。ば。を。牽。出。して。鰯。させ。よ。彼。を。殺。せ。惜。か。ら。む。や。とい。へ。歌二郎。含。笑。如。右。思。召。あ。ら。ば。吉。次。を。も。て。鰯。させ。べ。と。云。秋布。驚。た。仇。と。向。上。る。怨。の。目。尻。あ。ふ。初。歌二郎。と。面。を。對。亦。驚。た。御。身。に。裏。偏。袒。着。ふ。と。う。い。が。必。死。を。救。ひ。給。ひ。彼。無。名。氏。非。む。と。問。ま。く。を。る。を。歌二郎。耳。ふ。も。被。け。む。聲。を。寄。立。此。女。子。が。狎。々。げ

よ問をがりををるとうい。と叱懲いて恭しく。又經高は打對ひく。吾君鼠川加二郎が。食言をを信給ひそ。渠の瀬川吉次を。動の磯ふ撃果せし。と正へば申せども。吉次の尚死を。其從僕。関養七等共侶は伊万里の郷士。根塚若二郎許寄宿せしを。其既に生拘りと云を。加二郎實事とせむ。速く進み對う。その宣ををるとあれども。彼吉次も其撃果せしは相違あり。生拘られし別人あらん。といひせもあへむ。歌二郎は。黙然と打笑ひく。武行今更爭ふ歟。鄙語云論より證據。者共早く吉次等を。あゝへ牽け。と呼ひるふぞ。雜兵影應しく。捕索被けし吉次を。先ふ立つ。関養七と。若二郎と手枕を。珠數繫ふて。追立々々。秋布と推並べ。標類近く牽居れば。加二郎は吉次を見つ。駭然怪て。又云よしもあうりけり。歌二郎はさもこそ。と又經高は打對ひく。吾君彼等を御覽ぜよ。年尚少は吉次。次は侍る。養七。又其次ある男女二人。瀬川浦二郎が結髪。の妻。糸萩が二親ある。根塚若二郎と手枕。此夫婦も其女兒糸萩を追留んとて。旗津の浦に米さりを。雜兵等は捕拘いて。吉次夫婦主従と。共侶は牽もて来つる。昨宵夜半の事なれば。未だ知召

鎌倉將軍の時三絃の胡琴あるを聞かむと云ふ御宇の胡人一絃の琴をり來し事國史亦見たり。當時所云三絃の胡琴は胡琴の類なり。

れぬあらん。曩に鼠川加二郎が。撃しと云ひ吉次は非む。吉次の弟浦二郎。兄の厄代を。加二郎は知らぬなるべし。そいふとまれかくもあれ。吉次の清繩が。撃敵し候へども。多く得難。知智勇の武士。渠を身方ふを時。大利あらん。と思ふより。其さほく。難を盡く。説勸め候へども。未だ承引候。いづ。計ひ候。んと。問へむ。經高沈吟して。現吉次を身方ふささ。萬卒を得る。優べし。然れば秋布と養七と。若二郎手枕。鐙の索。震時寛く。吉次を責させよ。吉次早く。志を改め。若忠臣とあるなら。秋布を返し與へ。養七若二郎等をも親く使ん。倘又此議を承引。彼名刀も。吉次が。軀を銚をのさからむ。養七若二郎等をも皆殺して。秋布を。側室にせん。かれば養七と若二郎ふ。答を與へ。飽まで。吉次を。歐懲させよ。又秋布を。筑紫琴。手枕に三絃の。胡琴をも。それを慰めよ。人の心を和らる。音曲に。よくものあり。吉次が。張詰る。我慢を。琴の調子。和らげ。又二絃の。答をもて。歐。苦痛。堪えて。いうで。承伏せざるべし。秋布。養七若二郎。夫婦の者も。命令。背う。ば。先吉次を。殺し。勢ひを示さ。斬人。則鼠川加

二郎。雜兵等の打囲きて。をさく。非常と警めよ。と遣る限なく下知されば。歌二郎の一議
ふ及ばむ。吉次夫婦主従と。若二郎手枕。主命を具し傳へ。雜兵等も心得さ。つ。四人
の索を解されば。經高の秋布を。理なく側へ召登まつ。とく。琴を與へよ。といそが
立る性急。伊加太轉馬の阿と應て。歌女等が片よせ置る。筑紫琴と三弦の。胡琴を秋布
と手枕が。膝の邊へ推居。雜兵等が。携へる。筈を拿。義七と。若二郎は。透與。つ。早
く責よと催促。然程は。秋布の。親の冤家と。面り。膝を對て。海賊の。心慰む。筑紫琴。胸
の。あらべの。苦。さい。撲盡されぬ。十あまり。三の。緒。よりも。尚。肥。た。いう。で。良人の。命根。を。とり
と。め。ん。と思へども。怨の。涙。最。逼。る。細。指。は。假。爪。の。あ。ふ。敷。何。ぬ。敷。あら。波。の。音。の。こ
高。丸。船。庫。苦。海。愛。河。の。浮。世。の中。修。羅。の。鼓。れ。う。つ。つ。とも。夢。とも。う。ぬ。手。枕。が。同。く。敷。た
い。子。を。思。ふ。膝。は。三。筋。の。糸。絞。の。往。方。甚。度。と。問。ふ。よ。も。なく。音。の。澳。の。小。夜。衛。心。ち。ち。ぬ
死。生。の。海。より。深。た。もの。思。ひ。袖。ふ。雨。漏。れ。義。七。も。推。辭。う。ね。る。一。期。の。浮。沈。浪。の。葩。ち。り。ぬ
る。を。若。二。郎。さ。へ。呵。責。の。役。否。と。い。れ。れ。共。侶。は。筈。を。手。ふ。り。取。り。あ。が。ら。何。處。を。毆。ん。う

さう。との。あ。れ。昔。の。身。かり。せば。這。辱。ふ。あ。ふ。べ。と。形。あ。れ。世。を。憤。る。四。人。の。心。思
ひ。汲。む。吉。次。の。あ。う。く。は。屠。所。の。羊。れ。死。を。ぞ。俟。つ。觀。念。の。外。あ。う。り。を。時。あ。そ。移。れ。と。經
高。が。焦。燥。隨。ふ。呼。續。の。演。あ。ら。なく。は。波。風。の。彼。方。是。方。へ。立。降。ぐ。加。二。郎。轉。馬。伊。加。太。郎。罵
促。を。外。面。ふ。雜。兵。大。約。二。三。十。名。稻。麻。の。如。く。打。囲。き。弓。箭。短。槍。を。携。て。諸。声。合。て。聞
た。る。絆。の。勢。ひ。今。更。は。免。れ。う。と。田。ふ。集。る。鴻。雁。は。似。る。琴。柱。を。彼。是。と。直。て。懸。く。操。持
を。憂。や。浮。世。の。秋。布。が。調。子。は。做。ふ。手。枕。も。三。絃。響。時。試。く。も。涙。は。声。の。出。う。ね。乾。鴻。の。舩
を。生。隱。を。汀。渚。の。蘆。の。節。博。士。歌。二。郎。の。懷。より。笛。と。り。出。し。く。漂。々。と。吹。ぞ。合。は。る。管。絃。の。
三。箇。の。音。色。は。餘。念。を。た。經。高。の。側。は。遣。せ。盃。を。又。と。り。揚。て。轉。馬。は。酌。を。執。ら。つ。つ。歌
ふ。曲。子。を。看。ふ。と。興。は。入。る。息。出。る。息。五。韻。愛。た。た。秋。布。と。あら。べ。合。を。る。手。枕。も。音。を。資。け。て
歌。ふ。を。聴。け。ば。おも。ふ。更。筆。に。任。せ。ぬ。文。字。の。関。眺。め。あ。う。聞。の。関。の。戸。も。ゆる。さ。ぬ。聞。の。強。顔
さ。を。い。ふ。は。岩。越。を。浪。ま。くら。と。歌。ひ。う。け。つ。と。よ。と。泣。く。妻。を。見。う。へ。る。吉。次。の。思。ひ。を。も。嗟
嘆。して。命。運。薄。く。國。賊。の。爲。は。擄。と。あり。より。存。命。べ。く。も。あら。ぬ。身。の。救。る。と。も。あら。ん

う。と思ふ妻子の愚さよ。志士に溝壑は。經るゝとを辭せむ。勇士に元を喪ふとを。忘れむ
とこそ聞くものを。冠屨處を異はるとも。され豈賊は從はんや。とくく殺せ。經高と云
を養七推禁めく。そそ不覺之。世話云。乞者棒歐物体あり。忍び難死を忍ばむ。自ら破
るの悔あらん。權く渠がせんやうを見させ給へ。と諫まば。若二郎も亦声を潜めて。関氏の
言究めて理あり。枯葉を登らむ。朽木の花さうむ。然るを自ら死を急ぐ。大勇は非むう。
美里の阮も釋る日あり。身を天命に任まること。是大丈夫といえはくのと。諫めて言を振
揚れども。打ねばこそあれ雜兵等が。どくく歐と罵囂くを。尚歐せどく秋布が。又歌ひ
續ぐ声妙よ。よせてえ返は磯千鳥。以下又秋枕兩吟合奏。なく祢を人あらぬ火も。胸
は焼く火も絶間なく。こがれくて寄る船の。蟬の栲繩くるさの。長たうらみを誰う辭う
ま。歌ひも果むそが儘。琴を抱たう泣沈め。經高怒まる聲ふり立ち。今秋布等が歌ふを
聞く。皆是夫婦の情義ふり。只其良人の。縹緲を。解まく欲まる辭の。されは從ふ心
あり。又養七と若二郎。吉次をよくも歐さむ。さるふより吉次の。自若として承伏の。氣色

おたこそ奇怪かれ。三人俱は牽出して。首を刎よと。敷園は。加二郎得たり。と歡びく。御説
定は感佩せり。彼名刀を給いつく。某銚一候はん。といひつ。聽く立んとせしを。歌二郎
推禁めく。且經高を諫るやう。吉次を呵責の事。其御意を得て御意は任せぬ。執ぶとた彼等
が爲体を。怒らせ給ふに理りあれども。彼等の義士に貞女。勢ひをもく逼る時。いよ、
まをく死を樂みて。尊命は從ふべうらむ。尤石の弓といふとも。是を張ると強ければ。折
れう弓の要をなさむ。綴めて後張る時。本末狂はを折る事あり。然れば彼等を尚且く。
某は預け給へ。某再三意見を加えて。説諭一候は。承伏せて。候べし。かくても御意
は從ひむ。其度の許をべうらむ。加二郎が願ひのまふく。彼名刀を銚させ給へ。と言語
を盡し理義達辨ふ。經高漸く怒りを鎮めて。然らば瀬川吉次主従。秋布若二郎手枕等を尚
權く汝は預ん。利害を説いて從ひむ。再び且は報るふ及ばむ。此刀の利鈍と銚せよ
う。と期と推して。不老不死の名刀を。そが儘奪て遞與ふければ。歌二郎は受戴たう。若の
大量巨海等。よく容給ふとなく。いうよりてか。る恩命あらんや。幸ひ此上候は

む。と云は經高領れて。其義の既仕り。されい又席を易て。思ひの隨に醉を盡さん。伊
加太轉馬加二郎等も。あゝへ来よ。と鷹揚し。身を起しつゝ、除々と後堂に退くと雲時目
送る歌二郎の。雜兵等下知を傳へて。吉次と牽立させ。養七若二郎を捕巻いて。秋布と手
枕と。追立々々散動々々と。えや庭門より出て行。向の頼人の索拿さる。雜兵等の渠が左
右の手を。各々肩より引被て。俱に蹠おど續ける。

第廿三回

賢學凱旋を大團圓

陰に濁く明あらむ。悟く且妬むと。禽獸虫魚も皆相同じ。女子ふゝ嫉妬をたひ。七去の
一去を免ると雖も。和漢今昔あると稀。そが中ふ甚し。たあり。又甚し。からざるあり。
甚し。たを妬婦と云。こゝふ亦其一人あり。根塚若二郎が女兒糸萩是あり。迷ひの雲ふ身を
蒸されたる。愛惜の執念利鱗ふ入。鱗の索の斷離し。時。手ふ把る鱗を腰に挿く。吉次夫
婦を追蒐つ。外面投出されども。聊時の後さう。既ふゝ其往方をあらむ。心い
よく焦燥く。是首歟彼首歟と索る程ふ思ひ。旗津の港口に求ふ。ど見きば二艘の平

駄舟。繫留く水際ふあり。當下糸萩の。舟人を呼け。喃其船ふもの聞ん。廿あまりある美
男子。と十八九なる女子の。あゝらへ来つると見給ひ。と問へば一箇の舟人が。身を起し
つゝ欠伸し。来ぬるとも。問る。如き若た男女の。嚮ふ快船ふ打乗。松浦の方へ。走
り。と云は糸萩逼立。まゝの件の人々。追ひつゝこゝに求ぬる者。いうむ。と
の足ありとも。船賃を數し。かろむ。乗し。追著給へ。と憑め。舟人微笑く。原来御身の清
媛歟。こゝ日高。あらねども。世渡りおれ。推辭ん。疾乗給へ。と應を。一。竿。どり。諸
推寄る。船ふ閃と打乗。又推出。鰯網を張り。其處とも。ぬ。澳の方へ。漕ぐ。と
幾里あるを。あらむ。此夜の月。明。海上。静。ありければ。船の疾と大方あらねど。脱。し。人
ふ。い。ま。ど。追。は。う。で。え。や。曉。方。ふ。ある。隨。ふ。糸。萩。の。心。氣。疲。ま。る。寐。る。と。い。か。ゝ。目。瞋。々。ん。驚
覺。く。四。下。と。見。る。ふ。何。の。程。ふ。う。天。の。明。く。日。影。斜。ふ。未。の。左。側。へ。昨。宵。正。し。く。乗。り。り。平。駄
船。の。何。地。行。けん。身。の。大。き。ある。家。の。内。の。廊。の。下。ふ。臥。り。こ。い。何。だ。奈。と。胸。潰。ま。る。夢
り。現。り。ど。む。う。り。ふ。疑。惑。へ。居。て。見。く。も。起。て。も。更。ふ。安。う。ら。ぬ。心。を。漸。く。推。鎖。く。こ。い。

侶ふ後き一箇の婢の走るをや。と呼留る。糸萩は矮屏の蔭より早く立出。搦手を去つ。腰を折め。喃女中。もの問侍らん。瀬川浦二郎と云弱人か。一箇の女子を伴ふ。此御館ふこそをるな。妾は由縁の者侍り。遭へるべ。と他事もなく。憑めば聴く立かへりて。且豎ふ見つ横ふ見つ。逡巡して頭を打掉り。否浦二郎と云人のあらねど。瀬川采女吉次と云人の。そが妻なる歟。情人なる歟。秋布と呼きさる。いと美しき女子と共ふ。此御館ふとるぞか。初に君経高公の御心。母侍ひしと。いさく折鑑せられ。かども。遂に降参。あてけき。彼秋布と給ひり。身邊近く召置る。と人の噂は聞さる。と。俺們どももまど見ぬ人を。いうより。遭ふべ。御家老様願ひ申して。あんと。いなんとも。你の隨意に給ひね。といひ捨て。又行んと。と。糸萩は速く。袂は携り引留。其吉次と名告さる。浦二郎ぬいて侍る。か。と。幾間を隔る。後堂に置る。とも。とらる。妻で侍る者と。あふ母障りのあるべ。願ふ。竊に汲引。遭へ給ひね。情ぞや。や。喃々と泣聲立。口説くと。聴を振放。こ。無禮過さる。女子うな。浦二郎でも吉次でも。幾人妻のあ

この婢妾も凡女あらず。亦是得時。分身。あらん作者。明々地。このよ。を説出。き。蓋。餘情。あら。ち。あ。んと。看官。下の物。さ。の。段。不。幸。り。て。ま。し。これ。を。指。さ。し。

るべ。た。ぞ。思ふ。母。你。の。彼。人。と。情。由。あ。り。て。追。蒐。求。ぬ。る。淫。婦。は。こ。そ。あ。ら。ん。む。ら。め。不。義。淫。奔。の。武。家。の。太。禁。罪。得。が。ま。く。汲。引。と。せん。や。瀬。人。車。を。曳。後。き。く。朋。輩。達。ふ。叱。られ。ん。不。覺。あ。り。た。と。泣。き。く。行。を。違。う。と。引。留。ま。す。妨。げ。を。あ。と。揮。拂。ふ。掌。の。互。ふ。糸。萩。の。御。舎。と。撃。ま。く。踏。地。々。々。と。後。燈。を。撞。と。轉。輾。べ。い。う。と。て。や。腰。ふ。挿。さ。る。鎌。の。刀。尖。深。く。中。腕。を。む。り。む。ん。と。撞。所。さ。り。叫。苦。と。む。り。現。消。る。聲。は。驚。き。見。か。へ。る。婢。妾。の。打。駭。ぐ。胸。を。推。拊。く。豫。て。准。備。を。あ。さ。り。けん。袂。の。中。より。細。小。ある。一。箇。の。壺。を。取。出。て。糸。萩。が。瘡。口。よ。う。流。る。鮮。血。を。受。入。々。々。造。化。精。妙。と。戴。き。て。走。り。く。奥。へ。ど。赴。き。ける。且。く。て。糸。萩。の。漸。く。ふ。起。直。ま。ど。も。立。と。難。た。必。死。の。深。瘡。ふ。怒。れる。聲。を。戦。へ。く。噫。腹。立。一。朽。を。一。や。憎。し。と。思。ふ。秋。布。の。い。う。で。怨。と。復。さ。ん。と。く。帯。母。挿。さ。る。鎌。身。と。勞。ま。し。前。つ。世。母。造。り。罪。の。報。へ。る。歟。然。る。ま。て。も。恨。し。た。い。浦。二。郎。一。名。と。偽。り。て。嫂。と。夫。婦。母。あ。ら。ん。爲。母。の。と。闇。う。ら。ぬ。身。を。暗。く。一。天。の。免。さ。ぬ。逆。賊。母。從。ひ。給。ふ。何。事。ぞ。忠。孝。信。義。の。道。絶。一。人。母。云。と。も。い。ひ。甲。斐。ど。お。れ。怒。の。今。よ。り。九。つ。の。世。を。易。る。と。も。盡。べ。い。や。も。と。く。も。か。く。く。も。現。身。の。思。の。内。母。の。本。意。遂。難。た。現。

伊企儼ハ
欽明天皇即
位三十九年
殺害せられ
浦二郎ハ
山天皇の文
應元年ハ
生じこれ
此書第六百
三十九年

魄かの身ハ貴縁。死天の山路ハ伴ん。其折思ひ知れぬ。南無阿彌陀佛と唱へつ、身
よとつ利鎌と引拔さく。吭を掻んとする程。やよ等未通女。怒りおせど。と聲高やう呼
禁て。杉戸開き。糸萩が。身邊へ進み寄る者あり。是則別人あらむ。堀口歌二郎得時。登時
歌二郎にほくぐと見え。嗟嘆堪む。兩聲と激して。やをれ糸萩苦痛と忍びく。と云
よ。を仔細聴け。されハ瀬川胞兄弟。大方あらぬ舊縁ある。堀口歌二郎得時と呼ば、者
ぞ。と母不測の術あり。人の吉凶禍福ハ更へ。過去未來の事までも。是を知らむと云事
。情汝が前身を考へ母。むう。欽明天皇の御時。紀男麻呂等を將と。新羅を討
し給ひし母。其軍利あらむして。虜母せられし日本の義烈士。調吉士伊企儼と云者あり。伊
企儼ハ敵を罵りて。胡子和といひ。新羅國の大將ハ殺さざり。是よその後。六百三十九年
を歴て。伊企儼ハ肥前の松浦。瀬川健三道考が二男。浦二郎選如と生じ來つ。又伊企儼を
殺し。胡子和。則汝が身。あゝをもて浦二郎と妹伏の縁しを結べども。竟ハ夫婦
とあはれ得あらむ。其兄瀬川吉次を。浦二郎と思ひ違。其惑ハ深く。二親の論ハを

信けむ。吉次夫婦を追覓來て。自ら其身を殺す事。是前世の業報あれば。必しも怨むべ
らむ。されば又浦二郎ハ。曩ハ其兄吉次。名を冒し。形を似せて。鎌倉へ赴く海上。され同船
して血氣を箴め。其厄を釋せん爲。高王觀世音菩薩の。咒文を傳授さる。か。相摸
る。動の磯。鼠川加二郎。長城野兵太等。撃さ。か。尚死あむ。波引。數百里
を漂流。長門國大津郡。向の崎。著。時。浦人の。抱。着。蘇生。とを得。り。
あ。か。あれども數日の潮毒。い。膏。入。り。身。腫。張。て。行。歩。か。あ。れ。咒。文。の。外
ふ。もの。も。得。い。て。彼。處。ハ。三。総。を。送。り。い。尚。厄。中。ハ。あ。れ。ば。か。く。今。茲。ハ。彼。胞。兄。弟。の。災
厄。將。ハ。釋。ん。と。ま。され。よ。是。を。知。る。故。ハ。此。處。へ。引。よ。と。釋。ハ。我。も。見。り。けん。座。席。車
ハ。乘。せ。られ。木。魚。を。賜。り。咒。文。を。唱。へ。瀬。人。ハ。即。浦。二。郎。ハ。渠。ハ。神。咒。の。利。益。ハ。よ。り。て。
死。さ。る。と。を。得。され。ども。彼。潮。毒。を。治。せん。事。草。根。木。皮。の。力。ハ。及。ば。む。只。戊。己。の。年。月。日
時。ハ。生。じ。女子。の。土。德。脾。の。職。の。鮮。血。を。採。く。一。時。ハ。多。く。飲。時。ハ。舊。毒。立。地。ハ。除。祛。く。其。腫
氣。水。の。決。ま。る。如。く。卒。然。と。消。散。を。世。ハ。潮。毒。を。解。する。もの。土。あ。ら。ざ。れ。ば。其。效。あ。り。且

乞者 弄 前 諸 車 引
 乞者 弄 前 諸 車 引



後 腥血潮毒 初 前身を知る
 後 腥血潮毒 初 前身を知る



汝が八字生来の。戊己あるのミあらず。支干の未と午ふまゝ。亦是五黄土徳ふ屬せる。
汝が命運あゝ、ふ竭く。綱難脱れがさかるよゝを。され豫てより知るをもて。又幻術を施し
く。此船中へ引寄せり。さきば利鏢を働く。索を斷しも。術之。獨汝が執念の。よく
をる所。非ざりた。憶ふ。汝が前身。新羅の胡子和ある。此土母。く。糸萩と。
名づけし。も。名詮自性。萩を芳宜と訓る。皇國人の。誤。母。和名を芳宜と呼敬をも
の。漢名即。胡枝花あり。(胡枝花。本草列録。母見えたり。)胡枝花と胡子和と其音近し。
亦一奇事といひまくの。然れば。過世の業報。母。調の伊企儼が後身ある。浦二郎と縁を
結び。恩愛仇とあるまで。母。三稔の間。胸を焦く。遂母非命。母死するといへども。其脾の
臓の鮮血も。良人が三稔の難病の。良藥とあま大功あれば。成道成佛。疑ひ。心得る
歟。と説諭を。言語の中。母糸萩。迷ひの雲霧。母。天津日光を見る。如く。悔くも。取
し。身。の業報を。今。知る。感涙。やる方。ありける。志。を。勵。歌二郎を伏拜。又伏拜
し。乞と向上。女子の愚痴。胸狭く。思ひ違へ。つ。認違へ。恨。人。を。恨。一

戦袍へ前
集。直垂
小作。即
鎧直垂
後世。これ
陣羽織。を
その。製。あ
い。つ。ね
後集。俗稱
小従ふ。

現罪深けき。然るを神。佛。も。劣。給。御身の教訓。有難。まで。忝。名僧智識の
引導。優。を。心地。て。裏侍。よ。過世。仇。ありとも。あ。の。世。あ。て。妹。と。伏。縁。を。結
び。浦二郎。切。今。般。の。對面。を。といひ。かけ。又。泣。沈。め。歌二郎も。目。を。屢。動。さ。通。徹
妙。覺。期。之。誘。さ。ら。願。ひ。の。ま。ふ。選。如。對面。させ。瀬川。同胞。其。所。あ。在。と。く。進。ま
ね。と。呼。立。ま。ば。杉。戸。の。蔭。よ。應。く。を。立。出。る。浦二郎。頼。人。の。相。親。引。く。え。衣。裳。美。々
し。大。小。の。刀。を。腰。に。跨。へ。手。一。領。の。戰。袍。と。一。箇。の。木。魚。を。携。る。歌。小。續。く。吉
次。秋。布。養。七。も。出。る。来。つ。手。負。の。身。邊。に。圍。繞。して。歎。き。勸。る。を。中。に。浦二郎。怒。然。と。糸。萩
小。打。對。ひ。絶。て。久。し。吾。妹。子。が。臨。終。に。對面。く。もの。い。ひ。替。を。鮮。血。の。功。驗。併。焼。口
ぬ。の。あ。よ。あ。た。情。に。依。る。もの。之。最。ふ。が。身。を。加。二。郎。等。に。撃。れ。淺。痕。を。負。ひ。時。海。水。に
漂。没。く。兩。刀。を。失。ふ。もの。う。幸。ひ。一。執。權。家。より。が。兄。母。賜。し。この。戰。袍。に
身。を。え。か。さ。む。が。面。影。の。變。り。母。け。ま。ば。親子。兄弟。と。云。とも。世。に。認。る。者。あ。る。べ。う。を。
再。會。の。日。の。微。母。せん。と思。ふ。秘。置。さ。り。か。ど。され。嫂。御。を。認。ら。ね。い。ぬ。る。日。向。の。埒。母

来く。訪きよしも御身の上も。けふ初く聞得たり。これと御身に過世の怨敵。輪回に環の
端おれ如く。俱母肥の則母生を来く。夫婦の情義を果さねども。さう難病の本役。全く御
身の續おり。業因消滅をくらん母に。来世永々夫婦とおらん。嚮母に此身の厄難解除の爲
母唱へ。真言も。木魚も。今に妻の爲。長く菩提を吊ん。佛果を得よ。と勤めたる。世母頼一丸
良人の言の葉。餘波の花の糸。苦痛を忍び打向上。如此宣へば。あちく。死して榮あ
る。さう身の幸ひ。行末あがく百年の壽命終らせ給ふ日を。草の原母く。俟侍らん。采女様御夫
婦母に。面目あくる。今更母。いひとくよしも。侍らねど。見まく欲一丸に。父上母御前。孝行ら一
く仕へいせで。歎きを遣ま不孝の罪。許させ給へ。とかれ口説を。聞く母得堪ぬ。手枕に。聲を
惜むよ。と泣く。杉戸の蔭より。若二郎と。共母走。出く。女兒の右より。左より。やよ糸。糸よ。
母ぞか。参々公もお。母をいまるぞ。一言ことも。今生の。告別を。ま給い。まや。過世にとま
まかくもあき。極の質の。只ひとり子。養育。十あまり。六とせにお。よ夢と覺く。とり遣
され。柞樹の。何とあるべ丸。得世ぞや。悲一丸。あ。と携着。歎くを。禁る。若二郎も。苦一丸

胸を推拊く。手枕さの。と。歎きおせで。過世に。あら。現世母。子。を。先。ど。つ。る。壽命に。さう。
さう。時。情。欲。の。罪。障。母。こ。と。あら。ん。む。ら。め。嫉。妬。乃。滅。滅。を。一。く。想。思。病。一。く。空。く。あら。ば。心。
もと。お。丸。後。世。ある。を。今。に。迷。ひ。れ。雲。霧。を。一。く。臨。終。に。いと。愛。く。丸。母。十。念。勤。め。給。へ。か。と。云。解。
定。り。母。聞。え。く。や。親。を。見。か。へ。る。糸。糸。に。孫。よ。と。細。る。聲。立。く。参。々。公。母。御。前。け。ふ。より。い。さ。ら。に。
を。念。と。一。給。い。で。御。身。を。愛。一。給。へ。か。一。憑。み。を。く。お。丸。二。親。を。浦。二。郎。主。降。と。く。一。期。を。送。ら
一。給。ひ。お。ば。妻。が。爲。れ。追。薦。供。養。是。母。優。と。ある。べ。一。や。い。頼。と。侍。る。に。此。事。れ。と。い。ふ。言。毎。母。
思。絶。ま。く。え。や。色。變。る。知。死。期。時。吉。次。夫。婦。養。七。も。慰。ら。ね。く。唱。名。れ。聲。を。合。ま。る。諸。回。向。散。際。
清。き。糸。糸。に。合。掌。を。つ。思。絶。け。り。悵。か。ね。と。る。手。枕。が。俱。母。死。ん。と。泣。沈。む。を。歌。二。郎。諫。奨。一。
く。益。お。丸。悲。歎。母。時。を。移。さ。ば。豫。く。は。計。略。空。と。や。あら。ん。根。塚。夫。婦。に。亡。散。を。快。船。は。打。乗。一。
く。伊。万。里。へ。歸。り。く。葬。を。給。へ。秋。布。の。刀。自。も。今。更。ふ。泣。く。を。る。處。一。非。ぞ。親。の。仇。と。る。加。二。郎。
を。討。捕。る。准。備。肝。要。あら。ん。其。後。見。に。關。養。七。頼。川。氏。同。肥。も。か。の。期。の。手。配。心。得。と。る。歎。と。い。い。
ま。く。齊。一。勇。と。と。つ。夫。婦。兄。弟。主。從。の。さ。が。中。一。若。二。郎。に。惘。然。と。一。く。立。も。あ。が。ら。む。尚。此。處。

小留こまどまりを。一臂いちうでの力を勤あつせんと。只管ひたすら請こく己おのれざりけり。登時そのとき浦二うらふたに郎らうの。腰こしに帶おびさる兩刀りやうたうと。
 戰袍せんぱうを恭うやうやしく。兄あに吉次よしかつは返かへしく云いやう。こい皆御身みなみづかみの物ものあり。其それ借用かきかへしく。鎌倉かまくらへ
 赴おもむく折をり。兩刀りやうたうを海底かいていに遺おとせし。不老不死ふろふしの中刀なかつの。加二かふたに郎らうが綱あみに罹かり。大刀たおの又また是口主このくしゅの。
 何いつの程ほどふるかつぎ揚あぐ。けふ某それがしは賜たまひふた。先まづえや是これを受うけとり給たまへ。と云いふ吉次よしかつ歡よろこび。此
 兩刀りやうたうの親おやの像見かたみ。戰袍せんぱうの君きみの賜たまあると。失うしなはせし返かへさる。是これも亦また是口主このくしゅの。庇おほさる
 ありける歟や。三稔みざせ以來このかたに。腰こしに帶おびさる和殿わどのの兩刀りやうたうと。どぞかゆべしと。還與あたつ受うけつ。兄弟きやうてい
 夫婦ふうふ仇討あだうちの。準備ようあは暇いとまあり。然さる程ほどに鼠川ねせがわ加二かふたに郎らうの。吉次よしかつ降參かうさんせざるより。走馬場さうばの藁かま
 の中うちふく。不老不死ふろふしの名刀めいたうを。鉏あへ御覽ごらんは備そなへよと云いふ下知げちを歌二うたふたに郎らうの傳つたへ。かば。歡よろこぶと
 大方おほかた。えや時刻じこくふもあり。かば。組紐くみひもの襷たすきを被かけ。袴はかまを裾高そでたかに。結むすむ。奇物造りきぶつぞうりの兩
 刀たうを腰こしに帶おび。ひとり走馬場さうばに立出たたり。且まづく。經高つねたかの。彼名刀かのめいたうの鋭利えいりを見みん爲ためふ。槍垣やがき
 轉馬てんま。淳實じゆんじつ伊加いか太郎たうらう等を從したがへ。幔幕まんまく打うたる觀駿舍くせんしやの儲まうけの裯つぎに著つきければ。號口歌二うばぐたふたに郎らう得時
 の。百五六十箇ひゃくごじゅうごの雜兵ざふひやうふ。馬場ばの四方よほうを打圍うかこま。其身そのみに床几ふしうきに尻しりを掛か。觀駿舍くせんしやの埒らちの中

央あかをり。既さてふく加二かふたに郎らうの。歌二うたふたに郎らうが身邊みでりふ来き。彼名刀かのめいたうを乞求こもとま。歌二うたふたに郎らう微笑ほろほ笑わらて。件くだんの
 不老不死ふろふし北きたの。和殿わどのが吉次よしかつを斬きる時ときふ。某それがし是これを還與わたをべし。權あきらく等まちね。と推禁おしこめ。東ひがしの方かた
 打對うちあひひて。秋布あきし主ぬし從したが。瀬川せがわ兄弟けい。どくく。出いよ。と呼よねれば。風かぜも漏もさむ立圍たちかこさる。雜兵ざふひやう等
 が背うしろの方かたふ。忽たちまち地阿あつと應こたへ。秋布あきしの白しろき夾衣あはせぎぬに玉禪たまぜん。薙刀あきあたを挟わさむ。閑養七かんやうしちを從したがへ
 る。いち早く進まみ来きれば。瀬川せがわ采女さいに吉次よしかつの。弟おと瀬川せがわ浦二うらふたに郎らう選如せんじよと列立つれたち。錦にしきの戰袍せんぱうを被下きくだ
 入いりける。登時そのとき秋布あきし主ぬし從したが。加二かふたに郎らうが左右さやうより。進まみ近ちかづた化くわと疾視はげま。不俱ふぐ戴天たいてんの父ちちの。誓ちか
 鼠川ねせがわ加二かふたに郎らう覺おぼえ。汝なんがが謀書ぼろの故ゆゑをも。冤枉むじつに命いのちを預おせし。博多彌四郎はくたやしろ素延そえんが女兒むすめ
 秋布あきし。從したが。閑養七かんやうしち。と名告なをる。むともよくゑりつらん。覺期かくじをせよ。と語かたをまれば。加二かふたに郎らう大おほく
 駭おどろきて。是これの抑おさめ。經高つねたか公こう從したが。ねば。鉏あ物ものふせらるべし。吉次よしかつ夫婦ふうふ主ぬし從したが。此光このあかり
 景さの何事なにごとぞ。と問とせもあへむ。歌二うたふたに郎らうの。呵か々と冷笑あざわらひ。愚おろかるう。加二かふたに郎らう武行ぶかう。瀬川せがわ吉次よしかつ等
 の既さてえ。吾君わがきみは降參かうさん。仇討あだうちの事ことを願ねがへり。それを知しると思おもふらん。汝なんがに還かへる野心やん

あり。經高公を撃捕す。鎌倉へ立歸り其身の罪を贖ん。と豫く伎倆一淺智の胸中隠むとも
 えや發覺さりとく。勝負を決せよ。といひまゝ加二郎脱る、路おく。怒まる聲をふり立
 く。原来が計較の裏を早くもかゝり母けり。其識ある武行が。本事を思ひ知らまへ。觀
 念せよ。と嗚呼ふ旬旬。刀を抜き撃んとするを。秋布の薙刀も。拂退け進み入り面もふ
 らむ戦へば養七も又秋布を。資けり挑む刃の電火。丁々。礮と撃あふる。後の方より浦
 二郎が。身方を勇る聲高やう。動の礮の遺恨を譲る。それ後見をやるかう。變御前心
 強かるべし。透を窺ふ薙給へ。左よ右よ。と烈しき助言。加二郎いよく焦燥。背母立
 たる浦二郎を。斬んと見かへる敵の透間を。秋布得たりと薙刀を。振閃。丁と砍る。刃
 の光。加二郎の。蟬谷三寸深痕を負く。怯むを透さむ養七も。一大刀當る主の仇。力を動
 て斬伏せたり。當下秋布の。腰母挿る命婦丸の。短刀を引抜き。十々滅を刺し立ちあがれば。歌
 二郎の扇を披き。あふぎ立つ。稱賛を。然るに瀬川肥兄弟の歡び。いへば更へ。是を見る
 雜兵等も。聲を合して譽母けり。既母く經高の。瀬川同胞秋布等を。觀戰舎へ召登りて。主

従一味合体の。盃を取らせんとて。欣然と。侯程母。歌二郎母相伴る。吉次のえや浦二
 郎と。共侶は登り来つ。主の身邊母侍りたる。伊加太轉馬を。蹴倒せば。兩人齊一驚怒る。
 身と起。つ。腰刀を。抜んとするを。抜しも果む。見ぬう。たる肥兄弟が。銳利き刃は伊加
 太郎。轉馬も首と撃落されく。左右は撲地と仆きたり。思ひがけをた爲休母。經高頻に母驚
 駭きて。寄れや者共。此癖者を。とく擊留よ。と呼。逃んとすれば外面より。秋布養七走り
 聚ふて。先路を早く塞ぎたる。後の方母の吉次選如。俱母勇る聲高やう母。逆賊經高逃ると
 て。何處へう脱をべた。それ豫より時宗朝臣の。御諒母從ひ奉る。久しく索し甲斐あり
 て。堀口氏の内應を得たり。よりて目今誅するぞ。刃を受よと名告かけく。肥兄弟齊一撃大
 刀風母。經高に。挂うねる。深手母挫と倒し。を。起直る。聲を立寄。と忠臣と思ひたる
 歌二郎さへ心變りて。見つ。救ひぬ非道の舉動。噫朽を。と教團は。歌二郎進を出。呵々
 と打笑ひく。經高かくもまど曉得るを。と今福母く自滅を救ふ。三輪汝を養ひ。い
 謀反母與る所以母非を。それと累世因ある。瀬川氏肥兄弟の厄難故郷へ歸る時。汝を撃

して大功を立させんと思へば。然るに此乾坤丸の連環船も。樓閣亭舎も。美女雜兵も。二
が妙術の致す所。皆是海市蜃氣樓の類あるを知らざるや。雖然三稔米。よた夢をの
と見せざる。謬く汝が爲母。軍師とあり。清繩が受ける俸祿の恩母答る。二が聊の
心操へ。疑くば彼を見よ。といひつゝ、秘文を唱まば。今まで四下を捕圍とる。百五六
十箇の雜兵も。忽然と一々小蛇を變じ。齊一海に飛入。往方もまらむをあり。かば。經高
駭怪。と。忙然とる後の方母。とや立遶る吉次が。一声うけく閃く。刃の互に經高の
頸を撃れ。と。けり。活處母若二郎の。手枕と共に母。物の蔭より出く來つ。人々も打對ひ
く。燒口主の懇切母。糸萩が亡骸を。戌まで歸きといひ。きかども。仇討の緯の趣と。見んと
く。彼處母候ひた。獨加二郎のまゝ。て。經高さへ母。誅伏せし。定母國家の洪福。是は
就くも糸萩が。といひつゝ、眼色を屢動け。歌二郎慰め。其愁嘆のさる事ながら。本是因縁
あるとあれば。必しも悔べうらむ。獨母も説示せし。如く。浦二郎が前身の。調吉士伊金儼
之。伊金儼が妻大葉子も。節を守り歌を詠く。新羅の軍兵母。殺されたり。そが後身の。鯨倉お

る。博多倍太郎正延が女兒千鳥これ。此少女の浦二郎の妻母あるべし者あれば。そを糸萩
どと。思ひ做く。親まば久後安するべし。只吉次の前身の。大伴扶手彦ある。又秋布の前身の
松浦佐用媛あるの。まゝ。浦二郎千鳥等も。亦かゝる因果あり。努々疑ふべうらむと云
は。衆皆感佩し。然る母ても。燒口主の鬼神を欺く。智術あり。且來女浦二郎は。舊縁ありと宣
ひ。い。い。ある故母候。ど。と。齊一問へば。領さく。今誰より應むべし。されば長門の向
の洞母。數千載住る龍神。吉次選如等が外戚とる。坪氏のまが子あり。龍村の後裔あ
れば。捨難と思ひあり。お。を。も。三稔米。影母立形母添ふ。其厄難を防成。と。解れ
。母及べる。同胞功成り名を遂まば。是よりして相引まん。東に磯母二股に船あり。其
一艘母の瀬川胞兄弟。義布義七等打來して。早く鯨倉へ赴くべし。又一艘母の根原夫婦。糸萩
が亡骸を打來して。伊万里へ歸りて埋葬せよ。今い。も。是まであり。さうばく。といひ。け
く。まづ母出る外面母。降集の雲母打來りて。た。空中母登降と見え。形體に忽地金色に
神龍と顯き。長門地方へ飛去。母程母。乾坤丸に大船殿舎も。煙に如く消失せ。肥前州母



ありと云。無人嶋母ぞあり母けけ。輝れ不測に吉次等。兄弟夫婦主従に。駭嘆せむと云者あり。俱に其方と伏拜する。尚久後を祈りけり。かく吉次秋布浦二郎養七等の。經高主従れ三箇に首級と。鼠川加二郎が首級を携へ。若二郎手枕と共に。龍神に頼母従へ。東に磯母行へ見ゆ母。果して船二艘あり。そが一艘母に。糸萩れ亡散さへ来りてあり。かば衆皆いよく龍神の冥助を仰ぎ尊む。送母再會を約し。秋と分ち。各々船母乗ける母。其兩船に自り。東西母別きて走ると。飛鳥よりも速なれば。若二郎夫婦の乗る船に。瞬間母簇津母著さぬ。又吉次等が乗る船に數百里の海上を。只一晝夜母走る程母。次の日本に比及母。鑓倉母著るかば。吉次。浦二郎秋布を相伴て。執權の御邸に赴き。經高加二郎等を撃捕する。事云々と訴けり。登時北條時宗朝臣に。吉次が恙なく。歸參を訝りあがり。召近づけて其辭の趣を問給へば。吉次。其身夫婦の事の顛末。并母弟浦二郎が事。俊平が枉死。養七が事。又若二郎夫婦。糸萩が事。をべて。向の崎ある龍神の擁護母よりて。本意を遂ぐる。一五一十を述訖て。秋布母給りりる。仇討免許の御教書を返上しければ。時宗

感心大方あり。浦二郎秋布養七等も。共侶に見參せしめて。褒美の辭を給り。聽て首級實檢ありて。經高主従加二郎等を梟首せしめ。然後吉次。舊領の外に。采地五千貫を給りて。頼綱の次職ふさされ。浦二郎母も。莊園多く宛行ひ給ひて。末の龍華へかへ。遣り。且隔年小鑓倉へ參勤せよと命ぜらる。されば又博多倍太郎。龍神示現の趣を傳聞し。疑ふとなく。其女兒千鳥をもて。浦二郎母妻とし。且根塚若二郎手枕を。親の如く。又舅姑のどく親をうせよと。教訓して。俱に肥前へ遣りけり。かゝる程に秋布。南殿見參りて。龍神に解示されし。あぢのむら鳥と糸の放證を。云々と聞えあげ。かば。南殿歡び給ひ。且仇討の恩賞あり。叔宣ふやう。秋布。石切山ある。叢菊の中より。生れりといへば。菊子と呼べれもの。あらんを。當時諱よりありけき。菊の異名を取ると聞ぬ。然らばけふより改め。菊子といひまわしけきと。件の名をぞ給りりける。有此而秋布の菊子。其次の年より。六七年の程に。男兒四人産母ければ。吉次其二男をもて。外祖博多彌四郎が家を嗣いめ。三男を養七。養いて。関氏を冒し。四男。俊平が後とし。村山氏を冒しけり。又

路孝が屋
號を濱村
屋と唱るも
吉次等が母
濱村氏と
と前集ふ
見えこれ
縁あり

浦二郎も其妻千鳥も子ども多く産して。兩家東西ふ繫昌まけり。されば又根塚若二郎手枕
等。浦二郎夫婦の資ふよりて。淳世を安く住做しつゝ。八十餘歳の壽命をもちぬ。是より
先は吉次の叔父清繩が傳授せし。秘書の一卷を熟讀して。軍陣陰陽。説相の術をよくせ
し。バ。執權の子息達の師範と仰がれ。其家まをく榮しとぞ。

○傳曰。近世の歌舞伎役者。瀬川菊之丞。吉次菊子が情義を慕慕して。瀬川と稱し。菊之
丞と名づたなり。お世の人の知る所。案ずる。元祖瀬川菊之丞。享保十五年の冬。
初。東行し。中村勘三郎座へ出たり。當時評判記の品定上上吉也。此時第菊二郎。
京都榊山四郎太郎座ふあり。評判記の品定上上あり。此菊之丞が俳名を。路孝といひし
。吉次が父の名を。道孝といへる。よく暗合と云べし。又二代目瀬川菊之丞。養子
。世の人は王路孝といへり。小字を瀬川吉次といひた。是も亦采女吉次が名を
取る。強く説をふす時。菊次郎が俳名を仙女といひし。浦二郎が實名の選如と
字音相近し。これら蛇足の辨あるを。緯の因母識をのこ。

○曲亭主人自評して曰。第廿二回。吉次可責の段ある。音曲合奏の趣。頗。雜劇の脚
色母似たり。まうれども。乾坤丸の爲体。まべく神龍化幻の術中母あり。譬。妖狐の人
を魅。うま母異からむ。かゝる爲としておさる。事としてあらざる。とあらるべ
し。大約小説母。實場あり。虚場あり。虚場を云。乾坤丸船舶中の緯の趣。又村山俊平が
夢寐の一段。即是。實をよく情態と寫を云。虚を猶假の如し。虚實の二場を辨むる
者。よく小説を觀るといひまし。

○曲亭主人又曰。予が著したる冊子物語の。既。二三十年母及べるもの。其。刻板若干
亡失して。全。かろざるの故母。久しく擲出さる。あり。さる古板をあぐり求めて。足ら
ざるを補刻し。予母校訂を請むして。悉。母畫を易。文を誤脱して。再刷する者あり。聞
ぬ。云。括頭巾縮緬紙衣。化競丑三鐘。此他尚あるべし。凡。これら。の書。予が名號あり
と云とも。予が校訂を歴むして。他人の手母成るもの。おまは。予が全作とをべう。らす。
漫。戯の舊著を物がましく。い。ま。る。大人氣。お。た。母。似。た。ま。と。名。を。賣。る。の。膽。膳。さ。母。言。の。

お、母及べるのミ。看官是を察しねうし。



松浦佐用媛石魂録後編卷之七終

明治十六年六月十日御届
同年同月十五日出版

翻刻出版

東京麹町區飯田町三丁目十九番地

東京金玉出版社

東京府平民

吉井幸造

神田區猿樂町
三丁目壹番地

各地賣捌所

東京

和泉屋市兵衛

東京

森屋治兵衛

同

大倉孫兵衛

西京

田中治兵衛

同

出雲寺萬次郎

同

山田茂助

同

万字堂本店

大坂

柳原喜兵衛

同

求古堂半造

同

前川善兵衛

同

巖々堂

同

岡嶋新七

同

秩山堂

武州横濱

吉川伊兵衛



越中富山	大橋 甚吾	上州前橋	島屋 喜三郎
越後新潟	吉川 成造	同 前橋	黑崎 長三郎
同	堀 治作	下總千葉	乙 亥 堂
同 水原	嶋屋 六平	同 佐原	正文堂 利兵衛
越後小千谷	大塚 定吉	上總佐貫町	小松屋 長七
同 加茂	丸山 乙八	常州水戸	川 又 銀三
同 長岡	大橋 新太郎	野州宇都宮	佐藤 靜雄
同	上田屋 治八	尾州名古屋	川 瀬 代助
同 三條	樋口屋 小左衛門	三州岡崎	本屋 文吉
武州所澤	大黒屋 佐兵衛	駿州靜岡	浪花屋 市造
同 熊谷	松枝 悦三郎	豆州下田	平野屋 久七
同 八王子	高島 惠三	相州横須賀	竹川 新四郎
渡島函館	魁 文 堂	同 小田原	米屋 忠兵衛
上州桐生	竹 内 藤吉	甲州山梨	釜屋 喜兵衛
同 高崎	文心堂 源作	信州長野	西澤 喜太郎

信州上田	鼠屋 甲三	陸奥八戸	浦山 太郎兵衛
同 高遠	矢島 金八	羽前鶴ヶ岡	小池 藤次郎
陸前小野	佐々木 長藏	同 山形	五十嵐 太右衛門
同	三陸屋 利兵衛	同 米澤	須 佐 權平
同 石ノ巻	山口 啓之助	羽後秋田	本間 金之助
陸中盛岡	池野 藤兵衛	同 酒田	白崎 善助
同 黒澤尻	中嶋 無松	同 本庄	富田 三二良
磐城三春	川 又 定藏	播州姫路	山野 長平
岩代若松	田 中 治平	筑前福岡	林 斧 助
同	齊藤 八四郎	筑後久留米	赤司 平次郎
同 福島	上野屋 彦太郎	肥前佐賀	河内 莊助
同 桑折	平澤屋 喜四郎	同	熊本 吉造
陸奥弘前	玉田 平次郎	同 伊萬里	中村 千代松
同	石井 常吉	同 大村	山口 友一
同 青森	池田 吉助	肥後熊本	長崎 次郎

